

論理を読み取る力を育む国語科授業

国語科 和田雅博 今西千景 黒瀬加奈 平山ちさと

1. 主題設定の理由

(1) 小中高国語科12年間の学びの階層性・系統性・連続性

学習指導要領において国語科の目標は小学校・中学校・高等学校で以下のようになっている。

〔小学校〕国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

〔中学校〕国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する関心認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

〔高等学校〕国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

このように小中高12年間を通して系統的に国語の力を伸ばすことが求められている。中学校はこの3校種の間中に位置するため、特に小学校・高等学校とのつながりを意識した指導が求められる。そのためには授業の中で蓄積してきた「知」の実態を把握することが必要であると考えた。

(2) 国語科における「知」とは

国語科で伸ばすべき力は国語科学習指導要領にも明らかに記されているが、それらを整理し端的に言い換え、

- ・情緒力を伸ばすため、心情を理解するための「知」
- ・論理的に判断し、表現するための「知」
- ・伝統を現代に活かす力をつけるための「知」

これら3点を12年間通して身につけるべき力として位置づけた。

また、これらを支えるため、「語彙についての『知』」「文法についての『知』」が副次的に必要であるとする。

(3) 論理を読み取る力を育む

現在国際化社会の中で最も求められているのは、論理的思考力である。

「論理」とは何か。野矢茂雄氏は『新版論理トレーニング』の序論で次のように述べている。『ひとことで言えば「論理」とは、言葉が相互にもっている関連性にほかならない。』『一般に、論理力というのはすなわち思考力だと思われているのではないだろうか。論理とは思考に関わる力だと思われがちである。だが、論理力は思考力そのものではない。』『論理力とは思考力のような新しいものを生み出す力ではなく、考えをきちんと伝える力であり、伝えられたものをきちんと受け取る力にほかならない。つまり、論理力とはコミュニケーションのための技術、それゆえ言語的能力のひとつであり、「読み書き」の力なのである。』『より詳しく言えば、論理力とは、さまざまな言語能力

の中でも、とりわけ言葉と言葉の関係—ある言葉とほかの言葉がどういう仕方につながりあっているのか—をとらえる力である。』

言葉と言葉の関係、文と文の関係すなわち論理を読み取る力は小学校1年生から高等学校3年生までの12年間を通して、どの段階でどのような力をつけるべきなのか、発達段階に応じた国語教育を検証も含め、展開することにした。

(4) 感情の論理を読み取る

また、文部科学省の「これからの時代に求められる国語力について」の中には、「国語科教育の大きな目標の一つは、情緒力と論理的思考力の育成にある。」とある。

この「情緒力」と「論理的思考力」は相反する力であるとか、それぞれ身につけるべき別個の力であるのではない。

文芸作品などを情緒的に読ませたい場合にこそ、論理的に読む力をつけることで、登場人物の心情理解が進む。つまり、感情の論理を読み取るという部分において、論理的思考力は情緒力を支える力であると考えられるものである。

文芸作品を読むことにより、「ある状況がどのような感情を生み出すのか。」「ある感情がどのような言動を生み出すのか。」「ある言動がどのような感情を生み出すのか。」といった筋道、すなわち論理を読み取ることが大切である。またさらに高度な作品になると、表面には現れにくい感情を推測する必要が生じる。そのときに登場人物を取り巻く状況や言動が、その感情を推測する手立てとなる。これも論理を読み取るということである。

これらの論理的思考力をつけることで読む喜びが深まり、主体的な読者を育てることにもつながると考える。これらを感情の論理と定義し、その力をどのようにはかっていくのか、どのように伸ばしていくのかを考えていく。

(5) 具体的な授業の概要

1年では「言葉と言葉の関係」「文と文の関係」を「映像情報と言語情報の関係」に置き換えて、その関係を読み解くことを「文脈」を読み解くことと同一であると考えた。映像情報から必要な情報を汲み取り言語化する、そして映像情報と言語情報双方を組み合わせることでこそ表現できるものを感じ取る。あるいは映像情報と言語情報を組み合わせることで必要な情報を伝える。このような学習活動から論理を読み取る力を育む試みをした。

2年では「国語科における『知』」のうち3点目に挙げた「伝統を現代に活かす力をつけるための『知』」をつける上での「論理」について考えた。

3年では小中高で同一教材を用いた。感情の論理を読み取る集大成ともいえる活動を行い、さらに小学生の書いたものに、他者意識をもって評価をした。今までの学習の中で習得した力を活用して物語の構成や展開、表現の感情の論理に気づき、それを評価するとともに、一連の学習活動を通じ、自分のものの見方や考え方を客観的に振り返るものとなった。

2. 実践の概要

【1年】

写真と言葉が生み出す世界

授業者 黒瀬加奈

(1) 単元設定の理由

本教材は本来、1学年「読むこと」の指導事項「本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身につけ、目的に応じて必要な情報を読みとること」を目指した、写真と言葉の関わりについて考える教材である。

論理的思考は文と文、言葉と言葉の関係から考えられるものである。映像情報と言語情報から成り立つ写真と文章の関係は、読解すべき「文脈」と言ってもよい。本教材を用いて文章における言葉と言葉の関係、文と文の関係を、映像情報と言語情報(言葉や文)の関係に置きかえて考え、その関係を読み解くことで論理を読み解く力を養っていく。本単元ではその「文脈」を読みとることによって論理的思考を育てることを目指した。

本単元で自分の言葉や意見は何に由来しているのかを詳しく考えることによって、どのような道筋で考えて感情や言動を生み出しているのかをより自分の身近に感じながら考えることができる。文学作品を読んでいく過程において重要になるであろう、何とその感情に至るのか、ある感情がどんな言動や状況を生み出すのか、についてより深く考えることにつながる。また他者交流から相手の「文脈」に触れることによって、自分のものの見方や考え方を広げることができる。論理を読みとる力とは一見関係ないように思える教材でもあるが、2学年、3学年の論理を読みとる力に向けての一つのステップだと考え、本単元を設定した。

(2) 単元の目標

- 写真と言葉を組み合わせることの効果について考えることができる。
- 他者意識を持って自分の作品を作ることができる。
- 自分のものの見方や考え方を広げる。

(3) 評価規準表

関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む
言葉や表現について自分の意見をもととする。	具体的な描写に基づき、自分の考えを話せる。 必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理できる。	客観的事実と自分の意見をわけてかける。 文章と写真の関連性について自分の意見を書ける。 他者を意識した文体や言葉を選んで書ける。	文章などから必要な情報を集め、目的に応じて必要な情報を読みとれる。

(4) 単元計画(全3時間)

- 第1次 写真と詩が合わさった作品をみて作品の特徴を読みとらせ、自分の意見を持たせる。1時間
- 第2次 説明文を読み、説明文に写真がある場合とない場合での効果の違いを考えさせ、自分の意見を説明させる。
読み手にもたらす効果を想像しながら、タイトルや内容と関連させて写真を選択させる 1時間
- 第3次 一枚の写真の特徴を分析し、写真から発想させて、さまざまな表現方法で文章表現をさせる。
自分の書いてきた作品をグループで読み合い、他者に自分の作品について説明させる。 2時間

【2年】

「孔子の言葉」～漢文を楽しもう～

授業者 和田雅博

(1) 単元設定の理由

今、なぜ国語で「論語」を学習するのか。それは、人々の「よりどころ」となってきた「論語」の魅力学ぶためではないだろうか。世の中が大きな閉塞感に包まれている。先の見えない不安定な社会によって前が見えない若者が増えている。情報にあふれた不透明なグローバル社会において、人生を豊かにする普遍原理・道徳を先人に学ぶことが今の時代に求められている。だから今こそ「論語」の論理を読み解き、自分の考えを交流することで豊かに生きる価値を学ぶ意義と魅力を感じる。また、「漢文」は日本文化形成の発展に不可欠なものであったことや、日本人の思想・情操を豊かにしてきたことがあげられる。つまり、知識人の思想形成において欠かすことができない古典として読まれ続けてきたのが「論語」なのである。よって、「論語」は生徒の漢文への興味と関心を喚起するには最適の教材である。

中学校学習指導要領には3年間で古典学習として漢文に「触れる、楽しむ、親しむ」としている。本授業では生徒が「論語」を「学び」という視点から、孔子のものの見方や考え方と自分の生き方・在り方とを比較し深めていく。「論語」には、孔子の学問や人生に対する考え方が簡潔な言葉で書かれおり、それぞれに深い意味を持つ。この短い漢字の言葉は時代によって解釈は異なる場合もあるが、何千年もの間 いつの時代にも流れ続けるものが込められているにちがいない。

それらを読み取るために漢字一字のもつ意味に焦点をあて、一つ一つつまびらかにすることで原文の理解を深める学習が必要である。さらに、漢字文化圏の日本にあって漢字の持つ意味の広さと深さを知り、文章に対する読解や鑑賞の姿勢を身につけることは、漢字に込められた多くの人々の「そうなりたい」「そうありたい」という夢や希望を学ぶこととなる。その際、きわめて限られた時間と教材の中にあつて漢文学習の成果を得るには何といたっても中学生自身の感動をゆさぶり、思考に迫る教材でなくてはならない。生徒を漢文に出会わせ作者の思いを想像し、自分の体験と交流で得た視点をもとに考え孔子の言葉を理解することにつなげたい。そのため、事前に論語・孔子についてのレポートを課題とし授業内での相互交流することでさらに学びをより深めていくと考えた。

(2) 単元の目標

「論語」「孔子」について知り、漢文を身近に感じる。

(3) 評価規準表

関心・意欲・態度	話す・聞く	読む	言語的事項
・漢文の訓読に興味を持ち、自分でも訓読してみようと試みている。	・根拠をもとに自分の考えを発表し、他者の発言にも耳を傾けて考えを深めている。	・孔子の言葉と自分の体験を照らし合わせて、孔子の考え方に迫っている。	・漢文訓読の基本的な知識や技能を習得している。

(4) 単元の計画（全2時間）

第一次 レポートの交流から、「孔子」「論語」について知る。1時間

第二次 「論語」を読み、漢文を身近に感じる。1時間

(5) 論理を読み取る指導の工夫点

① 「論語」を読む

教科書の記載のとおり「書き下し文」「訓読文」の順で音読させた。「書き下し文」から取り上げ、範読を聞き、歴史的仮名遣いを押さえた。次に十分な時間をとり、必ず音読させ指名読みをさせた。訓読文においては、レ点、一・二点の知識を振り返えり、暗唱できるまで読み込ませた。書き下し文と訓読文を比べ、書き下し文の表記と訓点付きの訓読文とが同じ読みであることを再確認させた。また、この2つが教科書に並列して記載されていることから中国の詩を日本語読みにしたという先人の知恵と努力を感じさせた後に、現代語訳をみて大意をつかませた。

② 孔子の考えにせまる

- ・第一段 学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。

指名読み。口語訳の後、「学」「時」「習」「説」の意味を押さえた。「学びて時に之を習ふ」が、なぜ「説ばしからずや。」となるのかを時代背景から生徒に考えさせた。

- ・第二段 朋有り遠方より来たる、亦樂しからずや。

指名読み。口語訳の後、「亦樂しからずや」と思う「朋」とはどんな存在なのかを考えさせた。

- ・第三段 人知らずして慍みず、亦君子ならずや。

指名読み。口語訳の後、感想を発表させた。「人知らず」の意味をとらえさせるためA・B論を生徒に提示し、どちらが孔子の言葉に沿っているのかと考えさせた後、「慍みず」の意味を説明した。

A論…古への学ぶ者は己のためにするのだから、先生の道を学び得て自己完成できたらそれでよい。だから、他人に知られなくても怒ることをしない。これが君子の徳というものだ。

B論…君子は人に完全無欠を求めない。だから教育するものだ。もし人が鈍くて、自分の教えることを理解できなくても、君子はこれを許して怒ることをしない。」というもの。

C論…A論、B論以外の生徒の論。

- ・第一段落、第二段落、第三段落をとおして

「亦説ばしからずや。」「亦樂しからずや。」「亦君子ならずや。」と三つならんでいることの意味について考えさせた。「人知らずして…」の段が「学ぶこと」ということとどのように関連するのかという視点から考えることで生徒は自分が夢中になって打ち込めるものや、「学ぶこと」ということは、いわゆる勉強に限らず、自分と新たな世界との関わりの在り方・生き方の目指すもののために尽力すること。且つ、その姿のもつ魅力という広い意味で捉え直すことができ、生徒には漢文が身近に感じられた。

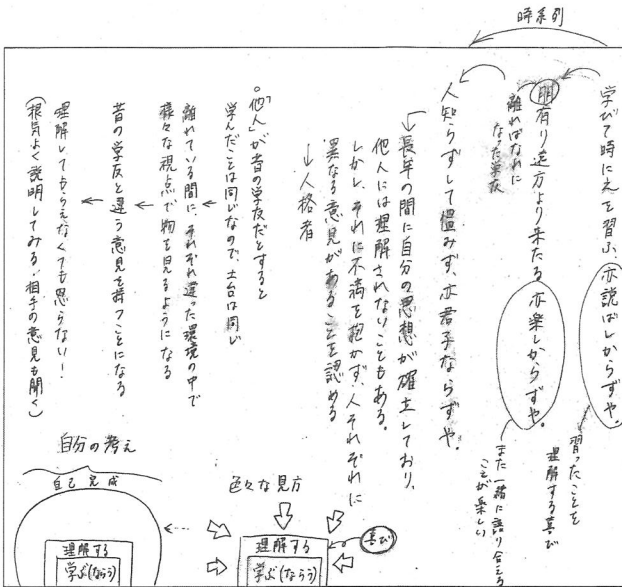
(6) 単元の実際

昨年度から「問い」を立てて読み物教材を読み込んでいく実践を重ねてきた。「問い」に対する思考の過程を書く過程に於いて、自分の言葉と置き換えてみたりしながらさらに加筆し思考を深めた。

そして、発表、プレゼンテーション、交流（ペア、4人班、学級内、他学級、他学年）し、今までの自分になかった意見や視点を得ることができ、さらに加筆していく活動を実践した。

しかし、交流を積み重ねることは生徒の十分な学びの深まりにつながるのかという疑問が生まれた。授業内のすべての活動グループの交流が深まるわけではない。グループごとの深まりの差を改善し、個々の思考を深めるするために、わかったつもりになった言葉をどのように見つめ直すかに着目し、交流活動を見直した。生徒からでてくる抽象度の高い上滑りした言葉について指摘することで、生徒が自分の言葉を練り上げることで「こういうことに気づいた」、「Aだと思っていたことは、本当はA'ということがわかった」ということをまとめとして書かせた。自分の言葉に本当にそうなのか立ち止まり、疑い、自分はどのように考え深めるのか。言葉を見つけ、そ

言葉に対して新たな「問い」を出すという形で自分がたどり着いた答えを探し当てた。わかっていないことを、わかった気でいると自覚することに導く活動を交流に取り入れた。また、更なるてだてとして学習ファイルの振り返りを活用した。先の学びが今の学びにつながり深化することの連続体験が系統的な学びの実感として生徒に感じさせることができた。



前のものの「亦読めしからずや」亦読めしからずやの流れた亦君子ならすやにのみなり、その二つの関連して三つありて君子たるものかなんかの説明していると思ふ。
 第三段で先生から学んだことを自分の復習、理解することにはまよひことある言ておれ、第四段で友人(同じ先生から学んだ)が訪ねてくるのは楽しいことであると言て、時代も考えると当時「勉強で苦しい」とはかなり珍しく、あまり困るいふことを考えらる。その上、遠方から来たこと、自分とは違う環境にいたこと、相手も習ったことは自分とはまた違うものになつてゐると思ふ。そのための第三段のように、困る意見を交流する機会には貴重なるもので、楽しいことおたはすである。それをふまえた第三段である三つを、からからすやの三つなりなり示していると思ふ。その困る意見を交流したときに、自分で自己完成したことは当然、困ることもあつてもおかしくない、自分で考えたことはそれで違つたため、で、怒つておつたりあつてしまつては、戦亂の絶えな世の中と同じになつてしまつて、それを受け入れ他人に知られなことを怒らな人こそが君子であり、それによつて言論で世を治めることを理想としたと思ふ。またこの教文が日本に伝わり、現代にまで多くのの人に知られてゐるのは、学ぶことがあつたりして、簡単に友達と意見を交流しあへるよつた。現代に学ぶ楽しさを思い出し、せよ自分の考えと違つても怒らなという教文は現代にも通ずるものがあると思ふ。

交流からの学び～生徒の感想～

この一年ぐらいの間 交流をして感じたことは、交流をすることで新しい視点や新しい意見、新しい読み方を得られ、また誰かに向けて話すことで自分の意見がさらに深まり、まとまってくるということです。誰かの意見を聞くことはもちろん大切だし、たくさんのお話を聞けると思う。しかし、私がとても大きく感じたのは話すことの大切さだった。誰かに向けて、自分の意見をわかりやすく論理立てて話すことが難しいということ。自分の意見には抜けている部分、納得できない部分がどれだけたくさんあるか。自分の意見を他人に向けた言葉に直し、説明しようとする中で、この一年の間に私が得たものはとても大きいと思う。これからいろいろなところで、どんどん意見交流していきたい。大きな話しになってしまうが「交流」こそが話し合いの第一歩であり、平和への第一歩にもなってくれると私は思っている。
 ※得たもの…自分の中で深く理解した上で、誰にでもわかる言葉を選んで説明したり、相手の年齢や状況に応じて説明のしかたを変えなければならぬことを知り、実践していった。

一人で題材について考えて読んでいくときに錬成できないと思う部分があると思う。それは相手に伝えることは比較的簡単だと思うが、国語科における交流は抽象的な部分もあって言いにくいところもあるが、そこを自分の言葉で言うのは頭も使うし、とても高いスキルが身につくと思う。私は「物事を他方面から深く考える」力と「抽象的であったり伝えにくい物事を伝える」力が交流することで身につくと思う。

「なぜ、こう表現したのか」「なぜ、こうよんだのか」という疑問に対して、その時代背景から仮説をたて伝える力がつきました。「伝える」ということは2年生になって特に力がついた。自分ではっと気づく発見をするとその考えから逃げないように焦って無茶苦茶な文になることがよくあります。2年生になり教科書の文章がプリントになり、それに自由に発見したことを記入していくという方法でそれが解消された。「伝える」ためには相手が理解してくれるよう、自分の考えを言葉で表現することが必要だと考えます。だから、自分が自分の考えをくわしく知り、深く理解することはもっともっと必要です。自分の一番の理解者になれるように3年生になっても頑張りたい。

私は小難しい言葉をならべた古典や和歌は嫌いで敬遠していたが、今回の授業でたくさんのがわかり親しみがわいた。そんなふうには、他の自分とはちがう文化を「ありえない」などを考えずに、もっと知りたい、もっとわかりたいと思うことで世界は変わっていくと思う。意欲と学びが見つかり、歩み寄り新しい自分（新しい興味、新しい知識）がつかみ取れるのではないかな。

（7）実践を振り返って

中学校の漢文教材は各教科書とも題名、書き下し文、次に訓読文が掲載されている。書き下し文に関して生徒は読みやすく、訓読文は読みにくい部分があることだろう。生徒にとって書き下し文から音読することが学びやすい。音読練習を充分重ねれば訓読文が読めるようになる。また、中学校の教科書では書き下し文と訓読文の文字の大きさが同じ、または訓読文の方が大きく掲載されている。よって、中学校では書き下し文に加えて訓読文が読めることにも重点をおいた指導を行う。中学校一年生で訓点の種類や用法については学んでいるが、中学校における漢文の学習においては訓点をつける学習までは求めてはいない。書き下し文の表記と訓読文の段落とが同じ読みであることに気づかせればよい。文体に慣れれば、それが漢文調とよばれる文体であることも確認させる。先人の知恵と努力を白文に訓点をつけて、日本の語順に変え、片仮名を付し、返り点を付けることによって日本語読みにしたということから感じる事ができれば漢文への親しみにつながるであろう。



2学級間で交流する生徒



リーダー交流会

古典学習においてより小学校・中学校での学びの系統性を考えた授業を考えたい。小学校教材では各教科書とも学習指導要領に従い、低学年で昔話、中学年で俳句・短歌、高学年で古文・漢文が配置されている。漢文に関して共通していることは教科書の構成である。題名につづいて本文が載せられているが、書き下し文に読み仮名が付されたもの、現代語訳の順に掲載されている。古典・漢文学習の入門期である小学校では、古典・漢文を読むことから親しませるために書き下し文を読むことが重視されていることがわかる。学ぶ意義についても考えさせておくことができる論語に関しては、5年生、6年生で学習する。このことを踏まえ、今回はそれぞれの校種学年の教科書構成にも着目して授業をしたが、さらなる研究が必要であると考えます。

【3年】

チョコレートのおみやげ～物語のしかけを読み解こう～

授業者 今西千景

(1) 単元設定の理由

①小・中・高同一教材の試み

優れた絵本や物語は大人になってからの再読にも堪える。その際、幼い頃に読んだときと全く違った印象や感想をもったり、違う意味を新しく発見したりすることが往々にしてある。読み手自身の成長がそうさせているのだが、もちろん国語の力の向上もそれに貢献しているはずである。同一の物語を発達段階の違う子どもたちがどう読むか、単純に知りたいと思ったことが出発点である。実態を把握することから始め、課題を明らかにし、改善点の検証を通して、系統的な指導の在り方を研究していきたいと考えた。

②教材選定の理由

本作品には物語中に物語がある構造上のおもしろさがある。ゆきちゃんとみこおばさんの現実の会話が伏線となって、二人の語る物語に影響を与える。繰り返し現れる描写がわかりやすく、さまざまな物語や小説を読んできた中学生はこのシンプルなしかけに気づくに違いない。人物設定がわざとあいまいにしてあるので、人物の読みとりを深めて味わうことは難しいが、純粋に「物語る」ことのおもしろさを感じることができる教材である。

「チョコレートのおみやげ」というタイトルが、物語のクライマックスの伏線となっている。冒頭部分のおばさんの「チョコレートって、おかしの中で、いちばんすてき」というセリフは、チョコレートそのものに注目させると同時に、そう発言するおばさんの「すてき」さの説明にもなっている。おばさんがこの後「三題話」を「とつぜん」始めても、「すてき」なおばさんだから違和感なく物語が進んでいく。物語は、おばさんとゆきちゃんの外側の物語の中に、おばさん、あるいはゆきちゃんが語る物語が挿入されているが、その挿入の前には必ずチョコレートを口に含む行為が描写されている。一連のチョコレートの描写が、見事にクライマックスに結実している。また、結末部分では、あこがれのおばさんから評価され、「すてき」な人に一步近づいたゆきちゃんの照れた様子が描写されて終わる。物語の挿入部分は読者が入り込みやすいように段階的に書かれているなど、構成がわかりやすく、また、難しい比喩や象徴表現があるわけでもないため、中学生は初読だけで物語の展開や内容は理解できるであろう。ゆきちゃんがあこがれるすてきなおばさんについては、人物像を読みとるための背景が書かれていないため、お母さんはなぜおばさんに頼んだのか、おばさんはそもそもどうしてこんな物語を考えたのか、「時間ってあまいん？」と尋ねられた時や「男はもどってきませんでした」の後に黙ったのはなぜか、「やさしい」とはどういう意味で使ったのかなど、中学三年生の教材文であれば追究してほしいような課題は提示できない。ただ、「やさしい」という印象表現について、どのように解釈したのかを考え合うことは可能かもしれないと考えた。

③中学生にとっての学び

今までの学習の中で習得した力を活用し、物語の構成や展開、表現の仕方に気づくこと、気づいたことがらを評価できること、自分の評価を書き言葉として表出できること、以上三点をねらいとした。

具体的な授業の進め方であるが、まずゆきちゃんが創作した部分を、生徒に考えさせた。おばさんの作った物語を「ちがう」と思ったゆきちゃんは「私は物語をこう読みたい」という主体的な読

者である。生徒が、ゆきちゃんの「ちがう」とおぼさんの「やさしいんやね」を解釈し物語を創作するところに、自身の物語の読み方やものの感じ方が表れるだろうと考えた。また、物語のしかけに気がつき、それを自身の物語にいかす過程で、自身の物語読解の方略を振り返ることにもなるに違いないと考えた。次に、オリジナルの物語の読解を行った。物語のしかけや工夫点を探ることで、読みを深めるねらいであった。最後に、小学生の書いた物語を読み、小学生を意識した文体や言葉を使ってその作者に手紙を書かせた。小学生の発想の豊かさに感動しつつ、自身の読みの成長も感じるようになる。これら一連の学習活動を通じ、自分のものの見方や考え方を客観的に振り返らせた。

(2) 単元の目標

○物語や小説を自分の言葉で評価できる。

○他者との交流を通じて、自分のものの見方や考え方を深める。

(3) 評価規準表

関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む
言葉や表現について自分の意見をもととする。	具体的な描写に基づき、自分の考えを話せる。 他者の意見との類似点や相違点をつかんで聞ける。	全体の構成を考え、展開を工夫し、本文を適切に引用して書ける。 第三者を意識した文体や言葉を選び、定められた条件で書ける。	構成や展開、表現の仕方、語り方等の特徴に気づく。 物語や小説の特徴を評価できる。

(4) 単元計画 (全3時間)

第1次 物語の一部が欠落した本文を読ませ、欠落部分を書かせる。1時間

第2次 書いたものとそのように書いた理由を発表させる。

全文を読み、作者の工夫を読みとらせる。1時間

第3次 小学生の書いた物語を批評し、手紙形式で書かせる。1時間

(5) 論理を読みとる指導の工夫点

①物語の欠落部分の創作

物語の最後の3行を残し、主人公のゆきちゃんが創作した部分を隠して、生徒に作品を提示した。作品の欠落部分を生徒自身に考えさせることにより、おのずと、題名との関係、伏線、「やさしいんやね」との整合性等、物語のしかけを考えざるをえない状況を作った。「物語のしかけを発見しよう」という直接的な課題ではなく、既習・既知の物語読解の方略を活用しないとできない課題であり、また、意識的に活用する中で、自分自身の物語観が表れてしまう課題でもある。

②創作作品の相互評価

四人班を作り、作品を交流させた。交流後、最も「すばらしい」と思う作品を一つ選ばせた。「すばらしい」の規準は、物語のしかけを考えていることが第一で、他には描写の工夫であったり、独創性であったりしてかまわないこととした。生徒は自作の工夫点や他人の作品の評価を自分の言葉

	<p>にわとりと男の関係を考えた作品 二人の幸せな時間を「とけるような時間」と表現している。</p>	
<p>挿絵も物語世界を作る要素ととらえた作品 挿絵にあるチョコレートの箱に描かれたにわとりのイラストに気がついている。</p>		

班で作品を交流する中で、伏線に気がつかなかった生徒も気づいていくことができた。また、挿絵に注目する生徒もあり、小学校での読みとりが活用されていることも、生徒自身が発見できた。にわとりと男の関係修復に字数をさく生徒が多く、物語中の物語に感情移入している様子が見受けられた。これは、もちろんおぼさんの「やさしいんやね」を解釈した結果であろうが、男とにわとりの物語が「ごんぎつね」のようにすれ違いの物語だからだろうか。

第2次「作者の工夫を考える」ワークシートの記述

- この物語に何度も出てきた「3」という数字の存在は、童話や歌にもあり、この数字の持つ不思議な存在感に驚いた。みこおぼさんの「やさしいんやね」の一言はどこかほかなく、せつない感じがした。みこおぼさんの言動が少しミステリアスで、ゆきちゃんはそれを「すてきだ」と思ったのではないかと思う。
- 物語の中でキーワードだと思ったのは、「チョコレート」「溶けていく。時間みたいに?」「やさしい」。中でも、「ゆきちゃん、やさしいんやね」という言葉の中にはいろいろな意味がくみこまれていると思った。私はもちろん、にわとりを生き返らせる設定にしたゆきちゃんの優しさもあるが、男とにわとりの関係をおもいやり、男がにわとりを許す設定にした優しさもあると気づいた。ゆきちゃんとおぼさんの関係は、支え合っているという点で、男とにわとりの関係に似ていると思った。
- ゆきちゃんの優しさは、にわとりを生き返らせることだけじゃなくて、おぼさんの言葉を使ったり、おぼさんの話を否定することなく自分がいいと思う結末に変えていることも含まれていると思うと、一つの言葉にたくさんの思いが詰まっていて深いなと思った。また、細かい部分でも、前に出てきた表現を繰り返し使うことで、物語全体のまとまりがでていると思った。「3」が他の話にも多いというのを改めてわかっておもしろかった。

授業者が気づいてほしいと考えていた物語のしかけは、班の交流の中でほぼ挙げられていた。「三つのチョコレート」「三回金づちでたたく」「三カ月」という数字に着目した生徒もいた。そこから、既知の物語とのつながりにも思いを馳せることができた。

用意していた「やさしい」の意味を問う発問によって、生徒はゆきちゃんとおぼさんの関係を改めて考え始め、男とにわとりの関係と重ねていった。この発問によって、物語のしかけを読み解くおもしろさだけでなく、登場人物の心情を読み解くおもしろさにも目を開くことになったようであった。

一トの作品を読み合ったときとはまた違ったおもしろさがあったようで、それは、作品に向かう自身の立ち位置が「お兄さん・お姉さん」であったからかもしれない。ふだんはワークシートに記述が少ない生徒も、課題に意欲的にとりくんでいる姿が見られた。小学生の教材を用い、教材を通して小学生と交流する機会を作ったことが、生徒の意欲を高めることにつながったと実感した。

(7) 実践を振り返って

単元の目標は達成できたと考えている。また、生徒の関心・意欲も高く、この実践は有効であった。ただ、同一教材を設定する際に、もっと多角的に吟味すればよかったという反省があり、それは今後につなげる重要な課題でもある。また、中学3年生と小学5年生の発達段階の違いをどのようにとらえ、分析し、今後の指導に役立てていくか、たいへん難しい宿題を己に課したと感じている。

3. 成果と課題

小・中・高三校共同研究主題「つながり・かさなり・ひろがる授業」を掲げて一年目である。国語科は12年間を見通した「論理を読みとる力を育てる」というテーマを設定した。これは、論説文に限らず、小説や古典読解にも必要な力である。

本年度は中学3年生で、小・中・高と同一教材で学ぶ単元を構成し、その中で、小・中では作品や手紙を通じた校種間交流も試みた。「実践を振り返って」にもあるように、確かな手ごたえは感じたものの、今後の研究をどのように進めていくのか、まだ道筋がはっきりせず、先は険しい。

また、2年生では漢文教材の実践を試みたが、今まで中学校で初めて出会っていた漢文を、既に小学校で既習しているとなると、中学校では単なる「漢文に親しむ」以上の深化・発展的な授業を考える必要がある。「伝統的な言語文化」の指導内容の系統化を図り、小・中・高の「つながり・かさなり・ひろがり」を目に見える形で提案することも、今後の研究課題の一つである。

1年生では、映像メディアと活字メディアがいかに関わり合うかを分析的に読み解く実践を行った。意味というものが、構成要素の組み立てからなる複合的なものであることを理解し、活字メディアではどのような構成要素の組立てがなされているのかを再認識する試みであったが、目標設定があいまいで、個々の気づきにまかせてしまった点が課題であった。多様なメディアに囲まれた現代に生きる生徒たちに必要なリテラシーとして、複合的メディアの中の活字メディア読解表現力を育むとりくみは、今後も研究していく必要がある。